有島武郎全集

第五卷

大正十三年七月廿五日印刷
大正十三年八月五日發行

（非賣品）

著者　有島武郎

東京市牛込區神樂町二丁目十一番地
發行人　足助素一

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人　島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍

第五卷

東京市牛込區神樂町二丁目十一番地
發行所　叢文閣
電話牛込　二五七三番
振替口座東京　四二八八九番

有島武郎全集　第五卷

目次

文學は如何に味ふべきか……一
內部生活の現象……二五
文藝と「問題」……五七
ルベックとイリーネのその後……六三
イブセン研究……七一
自分に云ひ聞かせる言葉……一一三
美術鑑賞の方法に就いて……一二五
美術鑑賞の方法に就いて再び……一三三
藝術に就いての一考察……一四三

婦人解放の問題……一五一
「ケーベル博士小品集」……一五三
惜みなく愛は奪ふ……一五七
運命の訴へ……二七九
溝を埋めよ……三三七
價値の否定と固定と移動……三四七
信濃日記……三五五
再び本間久雄氏に……三七一
イブセンの仕事振り……三七五
「槐多の歌へる」……三八七
愛——米川正夫氏に……四〇一
「悲痛の哲理」……四〇五
三つの希望……四〇七
一つの提案……四一三
自分自身の覺醒……四一九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

卑怯者……四二一
文藝家と社會主義同盟に就いて……四三一
ホキットマンに就いて……四三三
自己の要求……五五三
秋……五六九
藝術の不變性……五七五
一人の人の爲めに……五八九
地方の青年諸君に……五九七
餘裕と文化……六〇五

口畫

札幌の雪（一九一四年春作）……（卷頭）
著者原稿（「惜みなく愛は奪ふ」の一節）……（卷頭）

有島武郎全集　第五卷　目次　終

文學は如何に味ふべきか

一

「文學は如何に味ふべきか」といふよりは「私の作物を如何に讀むべきか」といふやうな勝手なお話になるかも知れません。私の作物に就いては讀者方より手紙を寄せて感想を言うて來るのや、色々な噂を傳へて來るのが可なりあります。この間も或る人より新聞の切拔きを送つて來たが、それには「或る女」の感想を記るし、その中から得た感銘を色々な言葉を以て表はし、そして最後に女を八つ裂きにした作者を呪ひたくなると云うてあります。又、北海道から來た人が確かなる話として告げた事がある。二十四五歳になる或る北海道の女の人が、許婚の人のある身を以て、偶ゝ行つた、或る漁村の眉目秀麗なる男らしい青年漁夫と戀に落ちた。その後女は私の書いた「生れ出づる惱み」を讀んだのであつたが、その小說に書かれてある事と自分の境遇が餘りに酷似してゐる事より大いに動かされ、益ゝ二人の間柄が深くなつた。然し次いで「石にひしがれた雜草」を讀むや、外國遊學

中の夫の留守に夫の友人と道ならぬ關係を結んだ妻の行爲を、夫が歸朝後これを知り、如何にも酷なる方法を以て妻を責むる項に至つて、非常に煩悶するやうになつた。然し乍ら、次ぎに出でた私の小說「或る女」は更に彼女の苦悶を增し終にヒステリーになつてしまつたといふ。そして次ぎには如何なる小說が現はれるか、それに依つて自分は己れの決心を固めると云うてゐるとその人は語りました。

これ等は一二の例に過ぎないけれども、私はこれ等の事に依つて非常に心を打たれたのです。私の小說が一人の人の生活にまでも影響したといふ事は私にとつては大いに考ふべき問題であると云はなければなりません。故に私はこの題の下に自然如何に私の作物を讀んで貰ふべきかと云ふ風にお話を進める仕儀になりさうに思ふのです。

二

さて、文學を如何に味ふべきかといふ事に就いては各〻その立場があります。私は私なりに自分の立場の上から意見のある所を大體申述べて見る外はありません。斷つて置きたいのは、私は人の說を紹介する程の學者ではない事と、自說はさうどん〳〵新らしく變へる事が出來ない事とです。或はこの話も前に話した高女聯合同窓會及び輕井澤に於けるものを繰り返す部分があるかも知れないが、その點は諒としていたゞき度いと思ひます。

文學を如何に味ふべきかの問題を言ふには、溯つて藝術と云ふ問題に觸れなければなりません。文學は藝術の

一部門であるからであります。故にこの藝術の問題を決定せば文學の問題もおのづから決定さるゝのであります。一體、我々の總ての生活は自己と自己以外(外界)との關係より成つて居ます。自己が自覺を持たない間は、その生活は無意識の生活であつて眞の生活ではない。例へば低級なる動植物の生活の如きものがそれであつて、眞の人間の生活とは大いに異なつて居ます。故に人間の生活は意識的に爲さるゝ時に始めて眞の生活が起るのであります。而して藝術も又、この意識的生活より胚胎さるゝのである。然し生活が實用的にのみ限られる場合、例へば一刻も實生活の爲めに暇のない場合には、我々の間には藝術は生れて來ない。然し貯蓄が生じたる場合即ち生活の餘裕が生じたる場合に始めて藝術の衝動(Impulse)が生れる。グールモン(Gourmont)の著に「高溫なき動物は如何にして暮すかを考へる。然し諸君は火といふ力を發見し、その自然の母から一人の高慢なる娘が生れた。その娘を文化といふ。その娘は火に盲從せず、それを以て蒸氣を走らせ……機械を動かす」と云つてゐます。人間は畢竟 tool(器械)を發見する事に依つて文化の創めを作つた。而して實際のパンの生活の餘裕をとり總ての文化的活動が生れて來た事は委しく云ふには及ばない事です。

三

斯く藝術は人間の生活の中に生れ出たけれども、次いで藝術とは何ぞやの問題が考へられて來た。これに對して始めて定義を下したのは恐らく獨逸の美學者バウムガルテン(Baumgarten)等であつて、藝術は美なるものを

取扱ふ事を見出だし、次いで獨逸の美學者等は「美とは何ぞや」の疑問を發したのである。この美に就いては獨逸派の美學の潮流は一勢に、美は何ぞやの探究に全力を注いだのであります。

一般には美の見方を大體三つに分つて居ます。その

第一說は、美はプラトンのイデア (Idea) の如く獨立せる存在であるといふ說であり、それには內在的價値があり、その價値を吾人が探る事に依つて藝術は成立するといふ說である。

第二の說は美は、吾人の享樂する心的境地である。故に美は外部にあらずして心が美しく思ふのである。美的享樂は實生活とは關係がない。この美的享樂を純粹に表現するのが藝術であるといふ說であります。

これに依れば私の小說に依つてヒステリーを起したといふのは美的享樂ではないわけであり、又私の小說がそれを與へないといふ事になります。

第三の說は、大體眞善美の三つの中、美は眞と善とに密なる關係あるものでなければならない。美を感ずると同時に道德的になり、又宇宙の眞理を攝むことを要す。かくの如からざるものは美でないといふ說であります。

以上三つの說の中、私はその孰れを採るか。不幸にして私はその孰れをも採らない。その理由としては、

第一の說に對して考ふるに、美は獨立せる存在であると考へ得又云ひ得らるゝとしても、又その價値は內在的かも知れないけれども、然し、我々はそれを味はなければ其の價値は判明しないのである。然らば我々が美を完全に見るに如何にして爲すべきか。それは人間の力では及びもつかない事である。私よりいへば、感得したるも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のののみが眞である。美は我々が事物に當つて我々の切り取るその部分以外は我々には役立たない。その價値はその切り取られた部分のみである。そして我々に最も役立つものは、その切り取れるもののみである。故に上記の假定は假定として價値が有るとしても實際の問題になりて夥しく價値を減じて來る。それ故美は獨立せる存在にして內在的價値ありとの說は實際の藝術家には餘り役に立たない說であります。

第二の說にはなか〳〵の强味がある。オスカア・ワイルド（Oscar Wilde）の藝術論の場合などに於て殊に斯かる感じを持つ。然し果して眞の藝術に接して全然利害關係を離れたる藝術があるべきであらうか。私の考ふる所に依れば、必ずそこには享樂者の生活に變化が起るべき筈である。一時的には無關心狀態あるべきも、やがて何等かの變化を伴つた生活を喚起すべき筈である。ワイルドは「貴きは藝術である。藝術の爲の生命である。我々の生活は藝術が作るものである」というてゐる。又、ラフアエル前派（Pro-Raphaelitism）のロセッチ（Dante Gabriel Rossetti）の繪によつて、始めてロセッチの描いたやうな女が英國に生れたりとし、ロンドンの霧を描けるタアナア（Turner）の繪によつて、ロンドンには霧が生じたと云つてゐるが、かく考ふる時はワイルドは藝術卽藝術を主張せる如きも、藝術が如何に生活に影響せるかを考へなければならないではなからうか。だからかゝる高蹈的な藝術觀にも不足があると私には思へます。

第三の說は美の獨立性を全く無視してゐる。かく言ふならば、美學は成立せぬ樣にならねばならない。綜合的なる眞理と道德と美の關係はあらはるゝも、美を獨立せるものとする事は考へられない。美の獨立性は全然失は

れる。かゝる條件を持つて行くならば、藝術はあるものの機關ともならなくてはならない。然し乍ら藝術は獨立せる價値と權利を有するものである以上は、美は概念的に考へられた眞とか善とかいふものと結び付いてゐねばならぬと云ふ理由はありません。

藝術が生活と直接の交渉のない一種の遊戯であると第二説のやうに考へらるゝに至つた譯を私はこゝに少し穿鑿して見たい。

四

この事を説く前に、私は人間の內部生活に對する私の考察を語りたいと思ひます。人の生活は、

一、本能的生活（Impulsive life）――自働的の生活を指して云ふ。

二、智的生活（Intellectual life）――外部の刺戟に對し內部の反撥する生活を云ふ。

三、習性的生活（Habitual life）――外界がその儘內部に働きかけて居る生活を云ふ。

以上三つから成ると思ふが、吾人の生活の大部分はこの習性的生活によつて導かれてゐます。又人間生活の他の可なり廣い部分は智的生活で成立し、外部の刺戟に對する內部の經驗から智識や道德がこの生活の御蔭で出來るので、この生活は人間に取つて大切なものであつて、また現在の吾人の生活に必要とする多くのものはこの智的生活の充實によつて滿たされてゐます。現在の社會生活が吾人に要求する生活法はこの生活であつて、それ以外

の生活は餘り重要視されて居りません。然しその上に私は一つの生活を置きたいと思ふ。それは實に本能的生活（イムペルシーヴ・ライフ）である。これは或る場合には今迄の道德を破壞し、無視してまでも、今在る生活より一歩を進んで、堅固（ステーブル）なるも一向進歩のない智的生活に對して一歩を進むる生活である、卽ち平安を主とする智的生活に對する進歩を主とする生活であります。

九月の中央公論誌上に於ける中澤臨川氏のベルトランド・ラッセルの哲學に關する評論には「ラッセルは眞の哲學は實用的目的より全然離れたる抽象的（アブストラクト）なる、數學的のものでなければならない。眞の哲學は實用的な臭味から離れ、流動の不安定から救はれて永遠の觀察を爲すべきものでなくてはならない」と主張し智識の威權を立派に言ひ現はせる人であつて、ベルグソンの流動の哲學に反對し、「普遍」と云ふ絕對な實在に味到する事を主唱したが、この學者が、世界戰役の結果二箇月の獄中生活の後にはその哲學の內容に著しい變化が起り、ベルグソンの主張してゐたやうな本能的の生活を認めて來たと云ふ事が書かれてあつたと思ひます。不幸にして私はラッセルの書いたものを一字も讀んでゐませんが、氏の改說の經路を非常に意味深く思ひました。この本能的生活は下等動物——又は石が人間に迄持ち來さるゝに至つたその力から出てその力に動かされる生活であります。幾百萬年を經て石が段々有機體となり、終に人間にまで進化した、その進化を司る力であります。この力が我々に働いて居るのであつて、或る時には智識を破壞し、或る時は道德を毀してまでも働くのであります。それが如何に生活を變ずるかは誰れも知らない。而して藝術とはこの力によつて人間の生み出したものを云ふのであります。

何故或る哲學者等が、藝術とは何等の努力を伴はざる、何等意志の作用なくして享樂し得られるものと考へたかは、本人が本能的生活に入つた時には、智的生活（インテレクチユアル・ライフ）に必要とせらるゝ如き努力が伴はないが故にであります。智的生活には努力とか犧牲とかが必要條件として考へられます。然るに本能的生活には衝動はあつても努力はありません。獲得はあつても犧牲はありません。その生活內容の經驗から美と云ふ觀念を假定した人々が美の享樂は實生活とは何等の關係なしというたのでありませう。又藝術には無目的なりといふ說は、普通の生活は働きの外に目的を置けるものが普通であるのに對して、本能的生活にあつては目的は生活そのものの中にある事より來たのでありませう。智的生活の目的は外部にある。然し本能的生活の目的は內部にある故、そこには苦しみも惱みもないのである。クリストの十字架上の苦しみもクリスト自身には何等の苦痛もなき安らかなものであつたらう。藝術も又、この本能より出づるものであるが故に他に目的はない。然し獨逸派の人々は美を假定して、美の創造は無目的であるといふのですが、これは、創作者の心持が本能的である故に衝動的であり、從つて目的なく見えると見る方が正しいと思ひます。

故に私は本能的生活が藝術を作るといひたいのであります。本能的生活そのものが藝術である。生活卽藝術である。そしてその生活を爲しつゝある人が藝術家といはるゝのである。人には多かれ少かれ本能的生活をしてゐないものはないから人は誰れでも多かれ少かれ藝術家であると云ふ事が出來ます。故に其處に始めて世の云ふ藝術を鑑賞するの道が開らけて來るのです。若し藝術家と云ふものが他の人々と類を絕した特種の人間であるとす

るなら何うして其の藝術家の生んだ藝術を普通の人が味ふ事が出來ませう。

然し、普通に用ゐられてゐる藝術といふ言葉は私の只今申した藝術と云ふ言葉程廣義に用ゐられてゐずに、私の所謂狹義の藝術に屬するものであります。それを一般に藝術と稱へてゐるのです。

蓋し、吾人の本能生活には一の表現を必要とする。この場合には種々あるが、物的材料を最も狹く、少く用ゐて、自己を出來得るだけ完全に表現せんとするものがこの狹義の藝術卽ち世間で云ふ藝術であります。より完全なる藝術は、より少く、純なる手段に依り、自己を出來得るだけ完全に表はさんとするものであります。藝術は官能に愬へるもの故、この事も成るべく純なる官能にアッピールするのを必要とします。それには眼若しくは耳に愬へるのが最もよろしい。彫刻、繪畫は眼に愬へるものであり、音樂は耳に愬へるものであります。一言すれば、道具立て少くして生活卽ち自己をなるべく人に表現せんとするものが純粹藝術の作用であります。ラスキン(Ruskin)が「藝術は一の經濟學である」と云うたのは面白い言ひ方であると言はなければなりません。

五

そこで以上に依つて簡單なれども、藝術は如何なるものか、如何にして作らるゝかが判明したであらうと思ひます。次ぎに本論に入る前に、歐洲に於ける藝術的思潮が如何なる發達をなせるか、而して現在は如何に變化しつゝあるかに就きて述べたいと思ひます。

大體歐洲文明の發達の跡はこれをラテン文明の時代（Latin）、ゴシック文明の時代（Gothic）、チュートン文明の時代（Tuton）及び來るべき文明の時代の四つに分つ事が出來る、今それ等の文明の推移發達を見て行きたい。

ギリシヤは東邦とアフリカより文明を吸收し、非常に華かなものを建設した。このギリシヤ人の藝術の特徴は調和（Harmony）の點にある。ギリシヤ人はその人種としては上品なる、僞りの出來ない人種であるやうである。故にこの人種の考へでは人生をごまかしては行けなかつた。これ等の人の考へには人生は儚く頽れ易いものと考へられてゐた。同時にギリシヤは非常に美しい國であつて美しい春と晴やかな夏を有してゐたが故に人心も又晴れやかなものであつたが、この聰明さから來る憂鬱とこの自然の美しさとがギリシヤ人の心によく調和したものではあるまいか。ギリシヤには光明の神であるアポロと破壞享樂の神であるデオニソスなどがあるやうに、常に相反した戰を闘つて行つたのである。この生活がギリシヤ人の持てるものであつて、悲劇的（解決なきの意）人生觀を與へた所以である。ギリシヤ人には人生は無解決なる戰闘として考へられてゐたのである。この無解決な爭闘の生活から希臘人が慰藉として求め出したものは兩極端の美しい調和の外になかつた。それが彼れの藝術であります。我々が今ロダンの「地獄の門」を見るにその感は全然ギリシヤのものより受くる感じと異なるのを覺えます。ロダンは希臘藝術を渴仰した巨匠であつたけれども、時代と國民性との相違は謬たずこゝに現はれてゐます。然るにギリシヤのものの中には實に美しいハーモニイのあるのが見受けらるゝのである。これを我々はクラシシズムと云ひます。處がギリシヤ文明がイタリーに移つた。即ち歐洲南部に移り、紀元五世紀から十五世紀に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com